

箴言の 5 章。以前にも箴言はバイブル・スタディでカバーしてきましたが、この 5 章は 2 時間 15 分かけてお伝えしました。子を持つ親ならば、あるいは孫を持つ祖父母ならば、これは必聴として、是非過去に私が教えた 2 時間 15 分、長いですが、是非必聴ということで、必ず聴いて頂きたい内容です。今日は時間がそれほどないので、その時ほどは時間をかけて詳しく話すことが出来ませんので、是非これを機会に録音されたもの、CD にも焼かれていますし、インターネットでもダウンロードして聴くことが出来ます。他にも思春期の子どもたちも是非聴いて欲しいと思いますね。また独身で、まだ結婚していない人たちにも聞いてもらいたいと思います。勿論、既婚者なら聴いて欲しいと思います。必聴ですね。ということは、全員に聴けということなんですけれども、全員必聴ということにしたいと思いますね。

この 5 章は 1 節を見て頂くと「わが子よ」という呼びかけがあります。これを書いているのはソロモンですね。ソロモンが自分の息子に対して「わが子よ」と、特に後継者はレハブアムという人だと紹介しております。「わが子、レハブアムよ」と父から子どもに語られているわけですが、内容としては性教育の内容です。SEX Education ですね。箴言は性教育についても多く言及しています。性の正しいあり方、あるいは間違ったあり方、性的な罪について、性不道徳についても、その危険性、またその取り返しのつかないような弊害というものを、赤裸々に、また明確に、具体的に語るものです。既に、性的罪に対する警告の文言は、2 章 16 節以下にも書かれておりました。また 5 章が終わったら、続きの 6 章、そして 7 章にも、性的罪に対する警告の言葉が繰り返し繰り返し語られております。文字通り再三再四にわたって、この性の問題について、セックスについて、警告がなされたり、忠告がなされたりしているわけですね。それほど繰り返して教えられるに値する内容ということです。一度教えたら、それで終わりではないということです。何度も教えるべきもので、特にこれは父から息子に対して語られております。イスラエルにおいて、性教育は父親がしたものです。男から男へということです。娘であれば、男性にも分からない部分がありますから、母親が娘に対して教えることがあるわけですが、原則としては宗教教育も、性教育も、責任を負うのは父親であるということです。勿論父親が信仰者でなければ、母親が聖書から正しい性教育をわが子に施すべきだということも、伝えておきたいと思います。性教育というものは、本来は家庭で成されるものだという前提をまずお伝えして、これを学校任せにはしてはいけません。あなたが、私たちが、子どもたちにこのことを教えなければ、この世が教えることになりません。そしてこの世が教えることは、甚だしく間違っています。恐ろしいほど誤っています。そしてそれらがもたらす弊害というもの、損害というもの、それは計り知れないということも伝えておきたいと思います。

勿論家庭だけでなく、こうして教会でも、正しい性教育がなされるべきです。教会の講壇からセックスについて、性的な問題について、性道徳について、性的罪について、不倫について、婚前交渉について(結婚前のセックスです。)、また同棲について、あるいはポルノについて、アダルトビデオについて、こうしたことが何遍も何遍も、繰り返し繰り返し、ハッキリと語らなければいけないと。残念ながら多くの教会では、講壇から牧師が「セックス」という言葉すら使わない。勿論英語でなくてもいいんですけれども、日本語では「性交」と言います。「性的に交わる」と書いて「性交」と言いますが、一般的にはセックスと言います。ただ現代では、セックスのことをエッチするというふうに表示します。「エッチする」というのはもともと、「変態」という言葉のローマ字の H から来ています。「変態する」それはまさに変態セックス、いかがわしいようなイメージを持ってしまうものですが、本来それは全然卑猥なものではないということです。それは聖書において、夫婦に許されているもの。夫婦間にのみ許され、夫婦間で最大限エンジョイ出来るもの、楽しみ喜ぶべきもの。それは神がデザインしたもので、極めて素晴らしいもの、生産性のあるもの、勿論それによって子どもが生まれるわけですが、どれだけそれが祝福なのか、そのことも聖書は説いております。聖書は禁欲主義を説いているのではないということも、この 5 章から教えられます。これをまずは父から息子たちに、クリスチャンホームであるならば、必ず聖書から子どもたちに性教育というものがなされるべきです。では、それはいつ

行えばいいのか、方法とかもいろいろ気になるところです。ただ中には、「私は親として子どもに性教育を施す資格はありません。なぜならば私は若い頃、淫らな生活を送っていたからです」と。「ふしだらなことをして、卑猥なことをして、不特定の人と寝て、たくさんの性的罪を犯してしまいました。不倫をしたこともあります。」とか「望まぬ妊娠をして中絶までしたことがあります。」とか「体も売っていたことがあります。売春行為をしたことがあります。」売る人も買う人もあって、そうした失敗をして罪を犯してしまうと、どうしても親になってから性について子どもたちに語ることを恐れてしまう、躊躇してしまうということもあると思います。自分にはそんな資格はないんだと。でもこの 5 章で語り手となっているのは、ソロモンという人物だということを出して下さい。ソロモンには、子どもに性教育を施すだけの資格があったのかということを考えて頂きたいと思います。彼の生涯は、聖書の中にある程度記されております。それを知っている人ならば、驚くと思います。彼には性について語る資格はないと結論づけてしまうかもしれません。なぜならば彼は、ありとあらゆる性的快樂に身をやつし、身を委ね、それに溺れて苦々しい体験をしているからです。多くの過ちを犯したからです。そしてそれは周囲にも害をもたらし、国家にも害をもたらしたほど、とんでもない過ちを数多く犯してしまった人物です。そんな彼が、子どもに対して性教育を行っているわけです。開き直ってそうしていると意味ではないです。そうではなくて、この性教育という問題については、躊躇している場合ではないと。これは重要なことであり、緊急性の伴うもので、その子の人格も、将来も左右してしまうほど、重大なことだからです。だから自分に資格がないからと言って、正しいことを伝えないで、そのまま手をこまねいて、そのままためらっていたら、時既に遅し、もう手遅れ、子どもは聖書から正しい性知識を持ってずに、性教育を受けられずに、あなたが恐れていたような罪を犯してしまう。そして子どももとても受け止めきれないような結果をもたらしてしまう、そういうことが起こり得るわけです。だから、自分に資格があるかないかなんてことを考えて、手をこまねいて、躊躇している場合ではないということです。あなたが神様からこの真理のみことば、聖書を通して、性のあり方というもの、神がデザインされた健全なセックスというもの、夫婦のあり方というもの、これを学んだならば、それをちゃんとしかるべき時に子どもに伝えなければいけない。その第一の責任を負っているのは、親であるあなたです。そして教会も勿論その責任を負っています。この社会が性的に淫らで乱れているのは、誰の責任でしょうか。最近の若者は性的モラルが全くないと、そんなふうには子どもたちのこと見てしまうかもしれません。でもその責任は親にあります。その責任は教会にあります。その責任は全クリスチャンにあるということをお伝えしておきたいと思います。なぜならば、聖書でクリスチャンは地の塩、世界の光と呼ばれているからです。クリスチャンだけが地の塩なんです。防腐剤なんです。この世界が腐るのを留める防腐剤なんです。クリスチャンだけが、この世界の暗闇の中にあって、光輝くことの出来る存在なんです。何が正しいのか、何が間違っているのか、どうあるべきなのか、どうあり続けることが出来るのか。そういったことを全て知っているのは、クリスチャンです。クリスチャンでないと正しいことも言えませんし、正しいことも出来ないわけです。だからこの世界がおかしくなってしまうと、墮落してしまつて、かつてのモラルはどこに行ったのかと、そんなふうには嘆いて、これを社会のせいにしてたり、若者たちのせいにしてたり、学校のせいにしてたりしているならばお門違いです。考え違いも甚だしいです。是非私たちは責任感を持って、このことをまずは自分の子どもに伝えていかなければいけない、ということを知って頂きたいと思います。ですから、自分に資格があるかないかなんてことは、今は置いておいて下さい。あなたの罪は、すべてイエス・キリストが十字架の上で負って下さいましたから、もしまだ未だに後ろめたさや罪悪感、自責の念で苛まれて苦しんでいるようだったら、イエスの十字架の足元に行って、<sup>ひざまず</sup> 跪いて罪を告白し、悔い改めて下さい。そうすればあなたの罪は全て赦され、清められ、そしてあなたはまっさらな者としてやり直すことが出来ます。もうあなたは赦された者ですから、そこからやり直していくことが出来ます。

そして 1～2 節を見て下さい。『<sup>1</sup>わが子よ、注意して私の知恵を聞け。私の英知に耳を傾けよ。<sup>2</sup>あなたが思慮深さを守り、あなたの唇が知識を保つために。』知恵を聞いて、英知に耳を傾けるのはなぜか。それは思慮深さを守り、唇が知識を保つためだと、目的に書いてあります。聞くこと、耳を傾けるのは、守るため、保つためだと言われております。聖書の言葉を聞くのは、実行するために聞くということです。性教育も勿論実行されなければ何の意味もないです。ただその知識を参考までに聞いただけで、その通りにしなければ、全く意味を成さないわけです。

ローマ人への手紙の10章17節、よく私が引用する箇所ですけれども、新改訳2017では少し訳が変わっているので改めて開いてみたいと思います。『ですから、信仰は聞くことから始まります。聞くことは、キリストについてのことばを通して実現するのです。』信仰は聞くことから始まります。私には信仰がありません、不信仰なんです、信仰が薄い者です、信仰が足りないです、不足しています。そういう人は、聞くことから始めなければいけません。聞いていないから、いつまでも信仰が増えない、満たされない、成長しない、と。不信仰な状態から脱することが出来ないのは、あなたが聞かないからです。一週間に一回だけ、日曜日に来て聖書の説き明かしを聞いて、それで信仰が育まれていないと感じているならば、それは足りていないという意味です。もっと聞いて下さい。平日にバイブル・スタディもあります。平日に来れなくても、録音されたものがあります。時間がありませんか、本当ですか。どうしてテレビを見る時間があるんですか。どうしてそんな余裕があるんですか。それ以外のことには、いくらでも時間を使います。信仰、この賜物は努力して獲得するものではありませんが、聞くことをしないと、折角頂いた信仰も段々萎えてきます。弱ってきます。衰えてきます。ついには死んだような状態になるわけです。それはまるで筋肉のようです。ちゃんと栄養をとって、筋肉というものも動かしていないと、だんだんやせ衰えてくるわけです。若い頃は筋肉隆々だった私も、自分で言うのもなんですけど、毎日鍛えていたわけです。1000回腕立て伏せをして、腹筋をして、背筋をして。鍛えることが大好きだったんですが、今はほとんどしていません。ですから筋肉はやせ衰えて、その分脂肪がついて、残念な身体になってしまったわけですけれども。でも、また鍛えればその力を取り戻すことが出来ます。萎えてしまった信仰も手遅れではありません。まずは聞くことから始めて下さい。

次に開いて頂きたいのは、ヤコブの手紙の1章22～24節。『<sup>22</sup>みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となつてはいけません。<sup>23</sup>みことばを聞いても行わない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で眺める人のようです。<sup>24</sup>眺めても、そこを離れると、自分がどのようであったか、すぐに忘れてしまいます。』みことばを聞くだけでなく、行う人になりなさいと。聞いているだけで行わなければ、右から左に流れてすぐ忘れてしまいます。

またヤコブの手紙の2章17節もお読みします。『同じように、信仰も行いが伴わないなら、それだけでは死んだものです。』

そして26節。『からだ<sup>1</sup>が霊を欠いては死んでいるのと同じように、信仰も行いを欠いては死んでいるのです。』行いのない信仰は死んでいるものだと、そんな信仰には何の価値もないです。聞くこと、耳を傾けるのは、それを守るため、保つためだと。聖書の言葉は実行するために聞くものということです。このことを改めて覚えたいと思います。ソロモンは息子に対して、私<sup>2</sup>があなたに聞かせることは、あなたが実行するためのものだと。そのことを父親が期待して話しているわけです。私もこのことを期待して皆さんに語っています。皆さんが今聞いていることを実行すること、それを期待して語っています。「ただ参考までに聞いておきましょう。」なんて言う人に対して私は語っていません。

テキストに戻って頂いて、3～4節。『<sup>3</sup>よその女の唇は蜂の巣の蜜を滴らせ、その口は油よりも滑らかだが、<sup>4</sup>終わりには苦よもぎのように苦くなり、<sup>5</sup>両刃の剣のように鋭くなるからだ。』ここから具体的に、ソロモンによる性教育が始まっていきます。“よその女”というのは、一体どんな女を言うのでしょうか。新改訳第3版では「他国の女」と訳されていたと思います。他の聖書の訳では、これは「遊女」というふうにも訳されたりします。いわゆる売春婦です。新改訳2017では、ここを“よその女”と訳しております。どの訳も間違いではないんですけれども、ソロモンの妻700人、側女300人、合計1000人の中には、当然他国の女、外国の女も複数いたわけです。彼は世界中から絶世の美女たちをかき集めて、妃としたわけです。その女性たちからいろいろな影響を受けて、ソロモンは偶像礼拝にも陥ったという話を前にしました。実はソロモンのお母さん、彼女も外国の女性でありました。いわゆるユダヤ人ではなかった、イスラエル人ではなかったということです。つまり、ダビデの不倫相手となった家臣の妻バテ・シェバという女性です。

他にも聖書の登場人物中で神に大いに用いられた人、例えばヨセフという人物、これはヤコブの12人の子どものうちの一人のヨセフ、エジプトに行ってエジプトのファラオに次ぐナンバー2、総理大臣になったような人ですが、彼

の奥さんはエジプト人です。またモーセという人の妻も実はエジプト人です。チッポラという女性です。ですから外国の女が皆、このように男を誘惑するような、ふしだらな者だと聖書は言っていないわけです。

新改訳 2017 では「他国の女」からこれを「よその女」と訳し直したわけですが、この「よその女」というのは「配偶者以外の女性」と定義したら一番分かりやすいと思います。伴侶以外の女性、妻以外の女が全員「よその女」です。あるいは女性の立場から言うと伴侶、配偶者以外の男、それは「よその男」です。それには気を付けなさいと警告を与えています。セックスというものは、性の営みというものは、結婚の枠内のみで得られるもの、成されるべきもの、楽しむべきものだというのが聖書の教えです。ですから配偶者以外の人とセックスをすることは「婚外交渉」と言います。あるいは、結婚前のセックスであれば「婚前交渉」と言うわけですが、それは姦淫の罪だと聖書は断じております。それは「よその女」「よその男」と交わるといふ行為で、これらをすべて姦淫の罪と聖書は断じます。そのことを私たちは聖書で罪と教えられているわけですが、罪と分かっているにもかかわらず誘惑に直面し、そして誘惑に陥ってしまうことがあるわけです。その弱さも私たちはよく分かっています。「よその女の唇は蜂の巣の蜜を滴らせ、その口は油よりも滑らかだ」と。甘くてスムーズだと、美味しい、うまい、甘い、誘惑の言葉、言葉巧みに言い寄ってくるわけです。

「性交率」というのは今、高校生の間ではかなりの数字をいろいろな統計が出しております。これは地域によっても大分違いますけれども、逆にセックスをしていない童貞、処女なんていうことをカミングアウトすれば、「まだセックスしていないのか、まだ童貞なのか、まだ処女なのか。」と訝しく思われたり、異性愛者じゃなくて同性愛者かと勘違いされたり、今はそういう時代です。どんどんそれは低年齢化しています。初体験と呼ばれるものはどんどん低年齢化していつているわけですが、そうした情報はどこからまず得ていくのか、誰の影響が一番受けたのか。これもいろんな統計がありますけれども、大体は先輩とか友だちから聞いて興味を持って、そして自分も同じようにしてみようと思ったと、切っ掛けがあるわけです。あるいは子どもだったら、性描写が露骨な漫画であったり、また昨今は子どもでも携帯電話とかスマートフォンを持っています。コンピューターも持ったりしているわけです。そうした媒体を通じて、いろんな情報を得るわけです。ポルノサイトを見たり、アダルトビデオ見たり、そうしたところからも情報を得るわけです。ネット、SNS、いろいろなものが今は溢れていて、私たちが若い頃、子どもの頃とは、子どもたちを取り巻く環境は全く変わっているということです。そういった情報は、そんなに簡単に手に入らなかったわけです。秘密のルートを経なければ、とても得られなかったり、とても子どもが出入り出来ないようなところに行かないと、それを購入しないと、なかなか知り得なかったことを、今はいつでも、どこでも、しかもタダで、いくらでも見れる、いくらでも知れる、そういう時代です。だから特にこの時代においては、聖書に基づく性教育を、子どもたちにかなり早い年齢から施していかなければならないという、特殊な時代に今私たちが置かれているということも知らなければいけません。現実をしっかりと見極めていく必要があります。甘い、滑らかな言葉を、子どもたちは周囲から常に聞いているということです。人を通してというだけじゃなくて、いろんな媒体を通して、画面を通して、聞いているわけです。甘い、美味しいことが書いてあるわけです。それらを目にして、聞くわけです。そして、それに惑わされてしまう。子どもたちは、沢山の誘惑に曝されています。この現実をしっかりと受け止めて、子どもたちに早い段階から警告を与えておく必要があります。

4 節には「終わりにには苦よもぎのように苦くなり、<sup>もろは</sup>両刃の剣のように鋭くなるからだ」と。最初は甘いんです。美味しいんです。うまい話、それは滑らかに、スムーズに、滑るようにして、簡単に得られる快樂なわけです。でも終わった後味が悪いわけです。後ろめたさや罪悪感、そして文字通り苦々しい体験もします。両刃の剣でグサグサと突き刺されるような痛みも経験するわけです。婚前交渉、婚外交渉、両方とも結婚の枠外でのセックス、これは全て苦みと、そしてこの剣による突き刺すような、刺されるような痛み、これで終わるといふことを子どもたちにも伝える必要がありますし、もちろんこれはティーンエイジャーばかりに語っているわけではありません。20 代も、30 代も、独身でもそうです。また既婚者でもそうです。結婚していたら、もう一切性的な罪に陥ることはないと思ったら大間違いです。多くの人が不倫をしています。多くの人がポルノサイトの依存症となっています。出会い系サイトとか、最近もいろいろ

なニュースが報じられておりますけれども、まさかあんな人が、というようなこともあるわけです。まさかうちの夫が、まさかうちの妻が、まさかわが子が。そういうことが、あなたの想定外であるかもしれませんが、常に誘惑は身近にあるということです。その結果、家庭崩壊が起こることがあります。不倫して家庭が崩壊するのは必然です。また不特定の相手とセックスをすれば、性感染症にかかるリスクも増えるわけです。HIV に感染することも当然ありますし、また望まない妊娠、その結果中絶ということもあるわけです。身体に文字通り、両刃の剣を刺すわけです。母体は傷つくわけです。場合によっては、もう妊娠出来ない身体になることもあり得るわけです。それは性感染症においてもそうです。たかだか性感染症、STD と思わないで下さい。それによって妊娠出来ない身体になることもあるわけです。一生の傷を負うだけじゃなくて、障害を負うこともあるわけです。いろんな弊害があるということ、4 節で聖書も警告しています。精神的にも不安定になって、心理的にもダメージを受けて、特に女性は自分の身体がまるで商品のように扱われるわけです。男からすれば、性欲を満たすための道具、はけ口となるわけです。人格は、その尊厳は傷つき、そして「愛していたのに、彼はただ私の身体が目的だったのか。」と深く傷ついて、中には自殺する人もあるわけです。

実際に不倫だとか、また具体的な性交という行為に至らなくても、ポルノサイトを見るということは大変危険な行為だということも、併せて伝えておきたいと思います。これも苦味とか、また鋭い剣で刺されるような弊害をもたらすということです。今現在、ポルノ的な内容を含むウェブページというのは、大体 4 億 2 千万件以上あると言われていています。ネット上で第 2 番目に大きいポルノサイトで、1 日に 1 億件の閲覧があるということです。ピーク時には 1 秒間に 4000 のビデオが流れているということです。この一つのサイトだけで、インターネット全体のトラフィックの 2% を占めるという、驚愕の数字も出ております。こういったことも知ると、もう情報は溢れていて、そしてこういった媒体は実に身近なところにあるということです。それらを見ていくうちに中毒になるわけです。インターネットポルノ中毒者、最初は当然誰もが中毒者になるつもりなんかさらさないわけです。それはアルコール中毒とか、ニコチン中毒と非常によく似ています。お酒を飲む人は、最初からアルコール依存症になるつもりなんかありません。タバコを吸う人もそうです。最初からニコチン中毒、ニコチン依存症になるつもりはさらさないわけです。飲んでも飲まれるなんて、あり得ないと思っているわけです。でも飲んだら飲まれるわけです。ポルノも同じです。見たら飲まれるわけです。取り込まれるわけです。その弊害というものを簡単にまとめたものをリストとして皆さんにお伝えしたいと思います。これはポルノの弊害の典型的なリストです。

- ・ 一日中セックスやポルノのことを考えている。
- ・ 自分が最初意図していた時間よりも長くポルノを見てしまう。
- ・ 繰り返し繰り返しやめようと試みるが毎回失敗に終わる。
- ・ 直面している問題から避けたり自分が持つ無力感や不安、ストレスなどを和らげるためにポルノを見る、またはそれらを見ながらマスターベーションをする。(自慰行為ですね)
- ・ 日に日により刺激的、あるいはより危険な内容のものを求めるようになる。(エスカレートしていくということです。もうアブノーマル、変態セックスをどんどん求めていく。レイプするようなものとかです。あるいは小さな子どもを対象とするようなもの、児童ポルノと呼ばれるものです。)
- ・ 自分がポルノ見ていることを隠すために、周りの人、特に家族に嘘をつく。(嘘をつくようになったら人格は破壊されていきます)
- ・ 児童ポルノなどの不法なポルノを見る。
- ・ 本来なら仕事や学業あるいは家のことをするための時間をポルノの鑑賞に当ててしまう。ポルノを見るために意図的に自分の社会的活動、仕事などや他人とのコミュニケーションを制限する。
- ・ ポルノを見ることが出来ない時、苛立ち、情動不安(落ち着かない状態)、あるいは苦痛などを持つ。(これは禁断症状ということです。)
- ・ ポルノ中毒のために結婚生活や仕事あるいは学業などを危険な状態にしてしまう。

- ・ ポルノ関係の商品を頻繁に購入するので経済的に深刻な状況になる。

といった項目が挙げられます。苦み、これはまさに害毒となるということです。人格まで破壊する。家庭も破壊する。ありとあらゆる人間関係も破壊する。仕事も、名誉も、経済も、大ダメージを受けるということです。勿論健康もそうです。自分の将来にも暗い影を落とすようになります。

次にテキストに戻って頂いて、5～6節を見て頂きたいと思います。『<sup>5</sup>この女の足は死に下って行き、その足取りはよみをつかみ取る。<sup>6</sup>その女はいのちの道に心を向けない。彼女が通う道はあてどもなくさまよう。しかし彼女は、それを知らない。』罪というものは、最終的には死に至らしめていくということです。

ヤコブの手紙の1章14～15節をお読みしますから聞いて下さい。『<sup>14</sup>人が誘惑にあうのは、それぞれ自分の欲に引かれ、誘われるからです。<sup>15</sup>そして、欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生みます。』

ローマ人への手紙の6章23節にも「罪から来る報酬は死です。」と書いてあります。これは姦淫の罪に限ることでないんですが、ありとあらゆる罪は最終的に私たちを死へと誘<sup>いざな</sup>っていく、その結末は死です。これは肉体の死だけじゃないです。いろんな死があるわけです。結婚関係も死ぬわけです。もう夫婦としては死んでしまうわけです。喜びも死にます。本来、夫婦の枠組みの中で得られるはずの性の喜びも死んでしまいます。性感染症とか HIV になって、性的に不能になることもあるわけです。そういった死もいろんな死が考えられます。

“よみ”という言葉は、5節に使われている言葉です。これは\*印が付いていて、欄外には「シェオル」とあります。ヘブライ語で「シェオル」。これは死者の行く所です。「墓」と訳されたりすることもありますし、ギリシャ語では「ハデス」というふうに言われて、地獄の一步手前といった所です。そこで究極の永遠の刑罰の場所、「ゲヘナ」と呼ばれる所謂地獄という所、その手前にハデスと呼ばれる所、あるいはシェオルと呼ばれる所があって、そこに死刑囚がずっと収監されているわけです。でもその死刑の日が来たら、そこから燃える火の池、ゲヘナに投げ込まれる、恐ろしい所です。そこへ私たちは誘<sup>いざな</sup>われてしまう。死というものは、私たちを永遠の滅びへと向かわせるもの。罪とともに、私たちはいつか滅んでしまうこととなります。そういった警告を、父親として子どもたちにも伝える必要があります。あるいは母親として、また教会として、また大人のクリスチャンとして、若い世代に、教会の子どもたちにも伝えていく必要があります。またこれは、勿論子どもだけが陥ることじゃない、大人も当然こういった誘惑に曝されながら、残念ながら私たちも弱さのうちに過ちを犯すわけです。そんな私たちに対する警告でもあります。自分は大丈夫だと思っている人ほど、怪しい状態な人はない、危険な状態はないと考えて頂きたいと思います。常に、大丈夫じゃないと、気を付けなければ自分も簡単に負けてしまう、そういった謙虚さを持って頂きたいと思います。そうすれば、十分にアンテナを張って、気を付けて、みすみす誘惑に陥ることがないように、むしろしっかりと距離を置くことが出来たりするわけです。これが知恵というものです。これは賢い生き方というものです。聖書は禁欲主義を説いているんじゃないんです。むしろ、私たちが最大限この地上生活をエンジョイするための知恵というものを教えているわけです。罪だとか言われると、ついつい生活が楽しめない、肩苦しい生活を強いられて、何かルールで縛られて、がんじがらめにされているようで、不自由に感じるかもしれません。でも実際にはその逆だということを知って下さい。罪というものは、禁じられているから悪いのではないんです。悪いから禁じられているんです。どれほど悪いのか、ということ聖書はちゃんと私たちに教えてくれていますので、そうした悪というもの、弊害というものを、正しく知って、だから神様はこのことを禁じておられるんだと。私たちが楽しめないように意地悪をしているわけではないということ、私たちが不自由な生活を送ることを強要されているというふうに思わないで頂いて、逆にこういった罪から解放される。罪を犯さなくても楽しく生きていける。お酒を飲まなくても、タバコを吸わなくても、ポルノなんか見なくても、ギャンブルなんかしなくても、十分楽しめる。それが楽しみだという人は、全部縛られているわけです。だからやめられないわけです。それほど不自由な生活はないです。お金も無駄遣いするわけです。煙で消えてしまうようなものに、体に有害なもののために、敢えて投資するわけです。それほど皮肉で愚かしいことはないと思います。でもそんな皮肉で愚かしい生活から解放されるために、賢い生き方を聖書は提示しております。

7節を見て下さい。『子たちよ、今、私に聞け。私の口のことばから離れるな。』「わが子」という呼びかけから、今度は複数の子どもたちに対して「子たちよ」と、ここにいる皆さんにも語られています。「今、私に聞け。」後で、じゃないです。今です。いつかじゃなくて、今です。性教育というものは、もう中学生になったら遅いと思って下さい。その前で、小学生であればもう高学年の時には教えておかなければいけないと思います。男の子、女の子でも身体づくりも違いますし、女の子の場合は初潮を迎える年もあるわけです。そういった個別にも体の変化というのが、成長の段階においてバラバラですので、決まった年齢ということではないんですけれども、その子どもの状態を見て、そしてむしろ子どもの方から聞いてくることがあります。こちらからアプローチしなくても、幸いなことに、親が迷っている前に、子どもの方から関心を持って、興味を持っていろんなことを、性にまつわることを聞いてくるわけです。あるいは他から聞いてきて、それについて疑問に思っていることをぶつけてくるわけです。その時にはちゃんと答えられるように、準備しておいて欲しいと思います。手遅れになる前に、**今です**。「今でしょ」と言いますが、今です、まさに。今私は皆さんにこのこと話していますが、これを後回しにしないで下さい。聞いているということは、実行するために私は話しているわけです。もうしばらくしたら、そのうちに、もうちょっと落ち着いてから、もうちょっと余裕が出来てから。何て言っているうちに、もうその時は過ぎ去ってしまって、もう手遅れということになるわけです。ソロモンが「私の言葉から離れるな」と言う時、それは「神の言葉から離れるな」ということを意味しています。「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによって生きる。」という有名な言葉があります。神の口から出る言葉によって、私たちは生きるんです。この「生きる」というのは、勿論地上の生活だけじゃなくて、永遠にわたって、死後においても言えることです。神の言葉によって、私たちは永遠に生きることが出来ます。神が与えた命をフルに活かして、最大限喜び、楽しみながら生きることが出来ます。神の言葉、知恵に満ちた言葉です。これをソロモンが語っているわけです。**そこから離れてはいけません。**

箴言の 22 章 6 節も参照したいと思います。『若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない。』若いうちに、しっかりとみことばを伝えて下さい。親のあなたが果たすべき責任です。「**そうすれば、年老いても、離れない**」とありますから、そのことを期待して、幼いうちから、若いうちから、しっかりと教えて頂きたいと思います。これは性教育に限らず、です。神の言葉、それは私たちの人生において必要不可欠なもので、ありとあらゆる領域において知恵をもたらすものです。何が正しいのか、何が間違っているのか、何が本当のことで、何が嘘なのか。私たちはどうすべきなのか、判断に迷うときも、この聖書の言葉がガイドとなります。

テモテへの手紙第二の 3 章 16 節をお読みしますから聞いて下さい。『聖書はすべて神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練のために有益です。』聖書は正しいことを教えます。間違ったことを戒めます。そして間違った状態を正しく矯正してくれます。そしてその矯正された正しい状態を維持するために、キープするために、義の訓練も施してくれます。それが聖書という神の言葉です。わが子には絶対に必要な言葉です。

テキストに戻って頂いて、続きを見ます。8 節。『あなたの道をこの女から遠ざけ、その家の戸口に近づくな。』「遠ざける」「近づけるな」これが知恵です。遠ざけなさい、近づけてはいけません。その家の戸口、風俗店の入口から、遠ざかりなさい。出会い系サイトのその入口から、遠ざかりなさい、近づいてはいけません。ポルノサイトの入口、SNS の入口。先ほども触れたとおり、ポルノ関連のウェブページというはもう溢れていると言いました。そうしたものにはまって、間違った性的な感覚を持ってしまい、そのまま結婚して、伴侶に対してポルノサイトの変態セックスを求めたり、アダルトビデオの女優のような異常なセックスを求めて、それを相手から得られなくなると風俗店に行くわけです。刺激を求めて、他の女性の所に渡っていくわけです。気を付けなければいけません。とにかく遠ざけるように、近づいてはいけません。このことは新約聖書でも繰り返し警告されています。

コリント人への手紙第一の 6 章 18 節。『淫らな行いを避けなさい。人が犯す罪はすべて、からだの外のものです。しかし、淫らなことを行う者は、自分のからだに対して罪を犯すのです。』「淫らな行いを避けなさい」と。

テサロニケ人への手紙第一の 4 章 3～6 節もお読みします。『<sup>3</sup>神のみこころは、あなたがたが聖なる者となることです。あなたがたが淫らな行いを避け、<sup>4</sup>一人ひとりがわきまえて、自分のからだを聖なる尊いものとして保ち、<sup>5</sup>神

を知らない異邦人のように情欲におぼれず、<sup>6</sup> また、そのようなことで、兄弟を踏みつけたり欺いたりしないことです。私たちが前もってあなたがたに話し、厳しく警告しておいたように、主はこれらすべてのことについて罰を与える方だからです。』と、自分の子どもたちにも伝えてあげて下さい。これが神のみこころだと。単なる親の願いではないんです。これが父なる神のみこころである。みこころを損じることが、致命的な罪だということです。

テモテへの手紙第二の 2 章 22 節。「避けなさい」と言われても、なかなか難しいと思うかもしれません。ここにはその秘訣が書かれています。『あなたは若いときの情欲を避け、きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。』一生懸命、見ないように見ないように、開かないように開かないように、クリックしないように、一生懸命そこには近づかないように努力するわけです。これは性的な罪だけではなくて、罪全般に言えると思います。酒をやめたい、タバコをやめたい。そう願っているならば、当然それらが手に入る所から遠ざかるわけです。酒場から遠ざかる、タバコを売っている自動販売機やコンビニから遠ざかるわけです。でも、それだけではなかなかうまくいきません。だんだん禁断症状が出てくるわけです。いつも行く所とは違う場所で、目の前に酒やタバコを売っている所にちょうど出くわしてしまったり、またそういった場所に自分が身を置いてしまうことも本意ながらあって、いくら自分が気を付けていても避けきれないということがあるわけです。そういう時にこのテモテへの手紙第二の 2 章 22 節を思い出して頂いて、ただ避けるだけじゃなくて、私たちには行く場所があります。「きよい心で主を呼び求める人たちとともに、義と信仰と愛と平和を追い求めなさい。」避けているだけでは、誘惑には打ち勝てないということです。きよい心で主を呼び求める人たちの所に逃げ込む必要があります。そして彼らと一緒に、励まし合いながら、助け合いながら、一緒に罪の告白をして悔い改めながら、義と信仰と愛と平和を積極的に追い求めることをしなければ、絶対に克服出来ません。だから、多くの人は避けるだけで結局うまくいかずに失敗して、苦々しい思いをもって、敗北感に苛まれて、そしてついにはもう諦めて自暴自棄になるわけです。結局ダメだった、頑張ったけど、努力してみたけれども、決心してみたけれども、結局ダメだったと。でもそれは「避ける」ということだけで留まっているからです。酒やタバコやポルノ以上のものが、あなたを本当にそれ以上に喜ばせるもの、満たすもの、幸福感や快樂をもたらすものが、それ以上のものがあれば、あなたはもうそれ以下のものには戻ることがなくなるわけです。それ以上のものをちゃんと知って、求めていかなければいけないということです。

テキストに戻って頂いて、9～10 節。『<sup>9</sup> そうでないと、あなたは自分の誉れを他人に渡し、あなたの年月を残忍な者に渡すことになる。<sup>10</sup> また、他人があなたの富で満たされ、あなたの労苦の実は見知らぬ者の家に渡る。』これが警告です。こういった弊害を既に被ってしまったという人も、この中にあると思います。本当に 9～10 節に書かれている通りだと。私は罪を犯して、全て失ったと。家族も失った、仕事も失った、信用も失った、評判も失った。今現在罪を犯しながら、バレていないと思っている人もあると思います。でも必ずバレます。そして必ず聖書の警告通りのことが、あなたの身に起こります。今すぐ悔い改めて下さい。それが賢明な判断です。自分だけは例外だと思わないことです。うまくごまかせる、そう思ったら大間違いです。隣の新潟県では、知事が出会い系サイトで女子大生と関係をもって、金品を渡して、知事を辞めざるを得ない。今までのキャリアも、今まで積み上げて築き上げてきたもの、周囲の人たちの信用も、全てを失ったわけです。東大卒の医師であって、弁護士資格もある、超エリートです。どうしてそんな彼が。彼は独身でしたけれども、でも出会い系サイトで援助交際をすれば、それが法にも触れかねない、非常にリスクのあることだということは当然知識としては知っていたわけです。いくら知識があっても、学歴があっても、知恵がなければ全てを失うわけです。知識がある人はいっぱいいます。政治家とか、医者とか、弁護士とか。でも彼らには知恵がありません。学校の先生なのに小さな子どもに手を出します。中には小さな子どもに手を出すために、教員免許を取る人もあるわけです。警察官はどうですか。警察官なのに、痴漢をしたり、覗き見したり、スマホでスカートの中を盗撮してみたり。それらを取り締まるべき人が、その罪に逆に陥っているわけです。やめられないわけです。分かっているながら。知識はあります。でも知恵がないです。そういった事例は枚挙のいとまがないほどです。子どもたちに、しっかりこの危険を警告として与えて欲しいと思います。どれほどリスクなことなのかを。

11 節に『そして、あなたの終わりにあなたはうめく。あなたの肉とからだが減びるとき。』終わりは全て苦い。もううめ



くしかないわけです。後悔しかないです。「こんなことになるんだったら、やめておけば良かった。」でももう手遅れです。「あなたの肉とからだが減びる」とありますけれども、これは文字通り肉体が破壊されることもあります。先ほども触れた通り、性感染症になる場合、望まぬ妊娠をして中絶するようなケースもあります。また身を滅ぼすという意味で、不倫の結果全てを失う、援助交際をした結果仕事を失う、また性犯罪に手を染める。ポルノ鑑賞によって離婚の可能性が 2 倍に跳ね上がるというふうに言われています。そういうリスクなことを避けるように。それはあなたの肉と身体を滅ぼす、身を滅ぼすことになる。

ローマ人への手紙の 1 章 26～27 節をお読みします。『<sup>26</sup> こういうわけで、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡されました。すなわち、彼らのうちの女たちは自然な関係を自然に反するものに替え、<sup>27</sup> 同じように男たちも、女との自然な関係を捨てて、男同士で情欲に燃えました。男が男と恥ずべきことを行い、その誤りに対する当然の報いをその身に受けています。』レズビアンとゲイ、所謂同性愛者、その結果は、不自然な性交の結果、当然その報いをその身に受けることになる。いろんな性感染症も具体的には挙げられます。今、日本では梅毒が大流行しています。性感染症の一つです。梅毒と聞いたら、もう昔のものだと多くの人は思うと思いますけれども、今特に若者の間で、特に女性の間で、パンデミックと言われるくらい大流行しているということです。2017 年、国立感染症研究所は梅毒の感染者がその時点で 5053 人になったと発表しました。5000 人を超えたのは昭和 48 年以来、44 年ぶりのことだそうです。梅毒がどこから来たのかについては、コロンブスが新大陸発見した頃、原住民の女性と交わって感染して、それがヨーロッパに持ち帰られて、世界中に蔓延していったという説が非常に有力です。実際に日本でも、コロンブス以前の人骨には梅毒による病変が全く見つかっていないという証拠も挙げられています。そして、この性感染症に感染している人はどのくらいいるのかということも、少し具体的な数字を挙げて皆さんに伝えておきたいと思います。男性では、20 代前半から 40 代前半、女性では 10 代後半から 30 代前半に多く、特に女性は若い世代に多いということが分かります。ある調査では、高校生でセックスの経験がある男子の 7.3%、女子の 13.9% が何らかの性感染症ですけれども、特に性器クラミジア感染症というのが女子高生の間では 1 割を超えているということです。女子高生の 10 人に 1 人は性器クラミジアに感染していると。自覚症状がなかったりして、そのまま不特定の人とセックスをすれば、どんどん感染が広がっていくということです。そして、子宮頸癌についても社会問題になっています。毎年約 1 万人が新たに子宮頸癌になって、約 3000 人が毎年亡くなっているということも伝えておきたいと思います。HPV というヒトパピローマウイルスが、性行為の経験がある女性なら一生に一度は感染すると言われていて、非常に身近なウイルスです。このウイルスの持続感染によって、良性なら尖圭コンジローマ、悪性なら子宮頸癌を発症することがあるということです。この子宮頸癌の発症率というのは、20 代後半から 30 代で急増していて、若い女性を中心に増加傾向にあるということです。また近年はオーラルセックスによって喉などに感染して、咽頭癌や口腔癌などを引き起こす可能性があるとされています。セックスのパートナーが多ければ多いほど、このリスクが高まるということ。セックスの経験の人数です。これが多いほど、感染リスクはより高まっていくということです。これを予防するためにワクチンを打っても、この予防接種によってまたいろいろな副作用が出て、今は厚労省では積極的にこの接種は控えるというかたちで、対処に苦慮しているわけです。このまま放っておいたら子宮頸癌はどんどん増えてしまう。でも予防接種をすると今度は副作用が出たりして、一生障害を負うようなケースもあったりして、手をこまねいているわけです。どうしたらいいのかと。私たちはどうしたらいいか分かっています。それはセックスをしないことです。そうすれば子宮頸癌にならないんです。少なくとも、こういったウイルスは他人から渡ってくるものです。不特定の人とセックスをしなければ、ウイルスを受け取ることはないわけです。ですから、そういった予防の観点から言いますと、最も理想的なのは結婚するまでセックスをしないことです。童貞、処女であること、純潔を守っていく、それが聖書的な真の性教育というものです。そうすれば、こういった感染を恐れる必要もないですし、予防接種なんかそもそも受ける必要がないわけです。もちろん HIV とか、他にもいろいろな性感染症というのは存在しますが、こういったものを聖書は当然警告として与えているわけです。先にそれがどれほど苦いものか、どれほど鋭いものか、それらがもたらす害悪、弊害というものがどんなに酷いものかを、予め警告して禁じているわけです。

テキストに戻って頂きまして、12～14 節。『<sup>12</sup> そのとき、あなたは言う。(「そのとき」というのは「もう後の祭り」という時です。性的罪を犯せば必ず後悔します。100%後悔します。そのとき、あなたは言う。)<sup>13</sup>「ああ、私は訓戒を憎み、私の心は叱責を侮った。<sup>14</sup>自分の教師の声に聞き従わず、自分を教える者に耳を傾けなかった。<sup>14</sup>私は、集会、会衆のただ中にもあっても、ほとんど最悪の状況であった』と。』間違いなく、必ず、100%後悔するということを保証します。もしあなたが性的罪を犯せば、100%後悔するということを子どもたちにも伝えて下さい。「自分の教師」というのは複数形になっています。「教師たち」というのが原文です。「教える者」もそうです。これは複数形です。一人ではないです。父親からも、母親からも、おじいちゃんからも、おばあちゃんからも、そして教会の牧師や教会学校の教師や、また先輩のクリスチャンたちからも、多くの人たちから私たちは警告や忠告を受けることが出来るわけです。それは幸いなことです。愛されている証拠です。いろんな人たちから警告をしてもらえ、忠告をしてもらえ、大変ありがたいことです。うざいとか、そんなふうには思わないで欲しいと思います。そうやってあなたに正しいことを言ってくれて、あなたのことを心配しているからこそ、警告まで与えてくれる。そういう人たちというのは、貴重な人たちです。大事にして下さい。この「教師」という言葉は、ヘブル語では「ヤラー」という言葉です。「投げる」とか「弓を射る」という言葉から来ています。教師はまさに生徒に対して、教えるを投げかけるわけです。あるいは警告とか忠告なんかを投げかけて、問題の核心を突くわけです。問題の的を射るように、教えるわけです。また「教える」という部分は、ヘブル語では「ラマードゥ」という言葉で、こちらは「打つ」とか「叩く」という言葉です。動物を調教する時にも、棒とか杖で訓練する、矯正する、調教するという、これは訓練を表す言葉です。ただ教えるだけじゃなくて、出来るようになるまで訓練する。ただ情報を伝えるだけではないんです。出来るようになるまで訓練して、忍耐を持って引き続き、繰り返し繰り返し出来るまで。それで初めて「教えた」ということとなります。ヤラーが「投げる」とか「射る」、ラマードゥが「打つ」とか「叩く」。投打にわたってということです。これが本当の二刀流です。エンジェルズに行った大谷翔平、活躍が報じられて、私たちも嬉しく思ったりするわけです。若い日本人が世界を舞台にして大活躍している姿、誰もが成し遂げていないその偉業を目の当たりにして、私たちも勇気づけられたり、感動したりするわけです。でもあなたも二刀流なんです。大谷翔平どころじゃなくて、あなたは子どもにとって英雄であるわけです。ヒーローであるわけです。ちゃんと模範を示してあげて下さい。特にこの、みことばを教えるという事柄に関しては、成功を収めて欲しいと思います。

14 節に「私は、集会、会衆のただ中にもあっても、ほとんど最悪の状況であった」これは皆さん経験していると思います。何度も私が警告しているのに、何度も皆さんは聞いてきているのに、今すぐ実行しなかった。あの時実行しなかった。だから今、最悪の状況です。この会衆の中にもあっても、この教会の中にもあっても、あなたは最悪の状況を迎えているわけです。日曜日に教会に来て、最悪の状況。礼拝に集っているのに、最悪の状況。悲惨です。後悔ばかりが募ってきますけれども、是非そこから脱して頂きたいと思います。最悪と言っても、今が最悪です。イエス・キリストを信じているならば、究極の最悪からはあなたはもう脱しています。究極の最悪とは、自分の罪の中で死んで、永遠に滅び、永遠に罰せられ、永遠に責められ、永遠に後悔する。地獄での状況が最悪の状況です。でもイエス・キリストを信じたら、もうあなたはそこから免れて、脱しているわけです。ですから今は、罪赦されていることを感謝して、これ以上罪を犯すことをしないことです。罪を今すぐ止めることです。そうすればこの集会の中で、この会衆の中で、あなたは最悪の状況を脱することが出来ます。

15～20 節をお読みします。『<sup>15</sup> あなた自身の水溜めから水を飲め。流れ出る水を、あなた自身の井戸から。<sup>16</sup> あなたの泉を外に散らし、広場を水路にしてよいものか。<sup>17</sup> それを自分だけのものにせよ。あなたのところにいる他人のものにするな。<sup>18</sup> あなたの泉を祝福されたものとし、あなたの若いときからの妻と喜び楽しめ。<sup>19</sup> 愛らしい雌鹿、麗しいかもしか。彼女の乳房がいつもあなたを潤すように。あなたはいつも彼女の愛に酔うがよい。<sup>20</sup> わが子よ。どうしてよその女に夢中になり、見知らぬ女の胸を抱くのか。』所謂貞潔、貞節について述べています。父親から息子に対して語られている言葉なので、女性が「よその女」として、淫乱な女性として悪く描かれていますけれども、女性の皆さんであればこれを置き換えて「よその男」と考えて頂ければと思います。「水溜め」とか「泉」という表現ですが、

古代イスラエルにおいて、今でもそうですけれども、水溜めとか泉というのは非常に貴重なものです。なぜならば雨があまり降らない地域において、乾燥地帯においては死活問題に関わるものです。命に関わる問題です。この水溜めとか泉、これを盗むとか略奪することは、死刑に値するほどの重罪ということです。なぜならば、その水溜めや泉を奪うということは、それを命をつなぐために利用していた人たちの、まさに命を絶つことになるからです。

**雅歌の4章12節と15節。**雅歌というのは箴言の後にあります。「ソロモンの歌」という英語の書名もついています。雅歌というのは、字義通りには「最上の歌」ベストソングですね。雅歌の4章12節と15節には、この水溜めとか泉というものが、その歌の中で妻として描かれています。自分の花嫁を表す言葉、それが水溜め、泉であると。夫はその乾いた性欲を、自分の妻で満たすということ。セックスというものは結婚の枠組みの中でのみ許されること、また満喫されるべきものだと言いましたけれども、それがまた命につながるものです。ユダヤ教の教師ラビは、この水を子どもであるというふうにも教えていました。水があちこちに流れ出てはならない、撒き散らしてはいけない。結婚の枠外で婚外交渉すれば、あるいは結婚前に婚前交渉をすれば、子どもがあちこちに、まさに撒き散らされるように生まれて、あるいは生まれても殺されたりして、それはあってはいけないことだと教えているわけです。自分の妻である水溜め、泉を他人のものにしてはいけない、というふうにも教えられています。

18節では「あなたの泉を祝福されたものとし」とあります。日本のビリー・グラハムとも言われている、羽鳥明というラジオ伝道者としてもよく知られている人ですが、その人はこの部分で「祝された二人だけのプライバシー」という言葉を述べています。夫婦の、まさに祝された二人だけのプライバシー、それが性の営み、夫婦の間で満喫されるべきセックスというものです。ですから聖書は禁欲を説いていません。むしろ夫婦のセックスは特権であると、これは二人だけで楽しむことが出来るもの、他の人に渡してはいけないもの。

18節では「喜び樂しめ」とあります。喜びが最高潮に達するほど、満喫しなさい、エンジョイしなさいと、聖書はそう教えているわけです。性的快樂というものは、墮落を意味していないわけです。それは夫婦以外であれば、墮落の何ものでもありません。でも夫婦間であれば、性の喜びというのは最大限喜んでいいと、もっと楽しみなさいと、その快樂は賞賛されており、推奨されているわけです。

19節では「彼女の乳房がいつもあなたを潤すように。あなたはいつも彼女の愛に酔うがよい」と。「酔う」という言葉は20節では「夢中」と訳されています。「わが子よ。どうしてよその女に夢中になり、見知らぬ女の胸を抱くのか」と。原語は同じ「シャガー」というヘブル語なんですけれども。ですから「彼女の愛に酔うがよい」というところは「夢中になるがよい」と言っても良いわけです。「酔う」とか「夢中」どちらの言葉でも良いかと思います。自分の妻に夢中になる、自分の妻に酔って酔いしれて良いわけです。お互いにそうであって良いということです。しかし残念なことに、現代では夫婦の45%ほどが「セックスレス夫婦」と呼ばれています。1ヶ月に1回ぐらいしか、夫婦でセックスをしていない。そういった場合は「セックスレス」と見なされるわけです。中には、もうめんどくさいとか、もうセックスなんて面白くありません、楽しくありません、気持ち良くもない、嫌い、疲れるだけです、そういう人もあると思います。もうそういう気がないんです、仕事が忙しくて、性欲なんてものはもう若いときに使い果たしました、とか。ところが人間というものは、かなり年老いても性欲が衰えないと言われています。男性であれば、70～80代でも若い時と性欲は何ら変わらないと言われています。ですから気を付けて下さい。老人施設でも、おじいちゃんがお尻を触ってきたりするわけです。胸を触ってきたり、抱きついたりするわけです。年寄りだからといって甘く見てはいけません。女性に関しては、年を重ねれば重ねるほど、性に関しては積極的になると言われています。それは生理が終わったり、いろいろと身体の変化が落ち着いてくるので、むしろ性というものに対してはようやく解放されるような、楽になるような、そういうことから肌の触れ合いというもの老人になっても楽しんだりする、そういう面もあって、年寄りだからといってセックスをしなくなる、ということではないということです。夫婦であれば、年老いてもセックスレスでなくて、ずっと楽しめるということが言えます。

セックスレスについてもなかなか教会では語られないと思いますし、みなさんも触れたくないと思うかもしれません。ただこれは夫もそうですし妻もそうですけれども、セックスを拒まれるということは一体どういうことを意味するのかとい

うことを考えて頂きたいと思います。まずコリント人への手紙第一の 7 章 3～5 節。まず聖書は何と言っているのかということ、これをクリスチャン夫婦は真っ先に考え、これに基づいて物事を捉え、判断するわけです。世間が何と言っているかではなくて、自分がどう思うかじゃなくて、聖書が、神が何と仰っているのか、これに従うのが信仰者です。コリント人への手紙第一の 7 章 3～5 節には、『<sup>3</sup>夫は自分の妻に対して義務を果たし、同じように妻も自分の夫に対して義務を果たしなさい。(「義務」というのはセックスの義務です。文脈を見れば分かります。)<sup>4</sup>妻は自分のからだについて権利を持っておらず、それは夫のものです。同じように、夫も自分のからだについて権利を持っておらず、それは妻のものです。<sup>5</sup>互いに相手を拒んではいけません。ただし、祈りに専心するために合意の上でしばらく離れていて、再び一緒になるというのなら構いません。これは、あなた方の自制力の無さに乗じて、サタンがあなたがたを誘惑しないようにするためです。』聖書にハッキリ書いてあります。セックスレスは問題だと。例外的に、祈りに専心するためにセックスを断つ、これならば例外として許されると。勿論病気の場合、あるいは妊娠している間とか生理中とか、そういう時にも相手の申し出に答えなきゃいけないと言っているわけではありません。その辺は常識的に判断して頂きたいと思います。明らかに、もう疲弊しきっていて、ストレスが肉体までも蝕んでいる状態で、無理矢理、ほとんどレイプみたいになってしまったら何の意味もないことです。ただ基本的には、夫婦の間でどちらかがセックスを求めれば、それに応えるべきだということです。あなたがどう思うかは関係ないということです。気持ちが良いか悪いかとか、上手いか下手かとか、あるいは疲れているか疲れていないかとか、よほど病気とか、よほど何か特別な身体的な事情がない限りは、あなたの気持ちとかは全く関係ないということです。これは夫婦ならばそうあるべきだということです。夫婦でなければもう話になりませんが、夫婦だったらこうすべきだということが書いてあります。でも、聖書の言葉の通りにしたら、必ず祝福があるということを信じ、期待して下さい。この通りにしたら、今まで全く知らなかった相手の側面を知ることが出来たりするわけです。案外、今まで楽しみきれていなかったセックスというものに、喜びを感じることも出てくるわけです。それを喜べなかったのは、あなたが毎回毎回応じてこなかったから、拒み続けたから。自分の気分や自分の思いだけでセックスをしていただけであって、相手に応じて自分を与えるということをしていなかったからです。自分を与えること、それがセックスです。自分が欲しいか欲しくないかじゃないです。これは「与えること」なんです。「受けるよりも与えることが幸い」だとイエスも仰っています。与える時に、今まで受けてばかりで知らなかった与える喜びを知ったりするわけです。新しい感覚を得たりするわけです。是非聖書に従って、断行してみてください。セックスレスだった夫婦の人、この中にも少なくないと思います。是非「今でしょ」と言っていますから、是非いつかではなくて、今ここで言っているわけではないんですけれども、是非二人で「二人だけの祝されたプライバシー」これを大いに楽しんで頂きたいと思います。そうすれば神のみこころが成って、これまであなたが体験したこともないような、ただの肉体の快樂以上のものが得られるということを知って欲しいと思います。セックスというのは、最も深いコミュニケーションの手段なんです。2つの身体が1つになるわけです。これは夫婦以外では絶対に経験出来ないものです。ですから、聖書で夫婦の営みを持つ時に「相手を知る」という言葉を使います。例えば、アダムがエバを知った、というふうに創世記に書いていますが、それはただ知り合ったという意味ではなくて、夫婦の営みを持ったということです。セックスをしたということです。セックスをするということは「相手を知る」ということです。「知る」という言葉はヘブル語で「ヤダー」と言いますが、これは単に知識として知るのではなくて「体験的に知る」「経験的に知る」ということです。「人格的に知る」それがセックスというものだということを覚えて欲しいと思います。ですからコミュニケーションをとるということです。セックスを通してしか得られないコミュニケーションがあるということです。そのコミュニケーションを持たないことがセックスレスの状態です。セックスレスの状態から深い夫婦の関係は望めません。そのうちに相手の方が「よその女」に走って行くこともあるわけです。全然妻が応じてくれないから、だから出会い系サイト、だから風俗、だから職場の同僚の女、ということになるわけです。そうなれば妻の責任でもありません。日本語でセックスを「性交」性的交わりと書きます。単に快樂を求めることじゃないんです。「性的に交わる」ことなんです。コミュニケーションを取りながら。そのような密なものだということを知って頂きたいと思います。

そして、もしそれに応じないと実際には、これは科学でも明らかになっていることですが、神経科学の分野

でも人間は愛し、愛されたいという欲求があるということは証明されています。その欲求が満たされないとうなるのか。それは医食住と全く同じです。基本的欲求ですから、ご飯が食べれない、これは苦しいことです。人と繋がり、人と触れ合う、一体感を持つ、親密な交わりを持つ、それは人にとって必要不可欠なことです。食べることが命に関わるように、夫婦であればセックスも夫婦の命に、生活に関わることです。そして、これは科学者が調査研究したことなのですが、最近離婚した、または恋人と別れた人の脳を研究したところ、身体的な痛みを感じている人の脳内と全く同じ部位が機能するということが分かりました。悲しみ、不安、恐れなどのネガティブな感情を感じている人の脳は、身体的な痛みを感じている人と同じ脳内部位が機能することはありませんでした。身体的な痛みを感じている人の脳と同じ動きをするのは、愛する人から拒絶された人や、別離を経験した人の脳だけです。ですから、夫婦でセックスを拒まれると傷つくということです。「すごく綺麗な夕日だから見てよ、この記事はすごく面白いから、あなたにも読んで欲しいの。」と妻が言ったとします。あるいは夫が言ったりします。でもその間もあなたはスマホを見ています。その間もあなたは新聞を読んでいます。その間もあなたはテレビをぼーっと見えています。そうすると伴侶の脳の中では、体に障害を負ったような痛みを信号として受け取るわけです。拒絶するたびに、殴られたかのような、刺されたかのような、傷を経験するわけです。それが続くともう傷だらけになってくる、ボロボロになってくるわけです。それがセックスストレスの弊害でもあります。

テキストに戻って頂いて、**20 節**は「わが子よ。どうしてよその女に夢中になり、見知らぬ 女の胸を抱くのか」と。夫婦以外のセックスの営みは一時の快樂をもたらしますが、一生の後悔をもたらすわけです。むしろ結婚して、夫婦の間でセックスを満喫しなさい。夫婦のセックス以上のセックスは、結婚外には存在しないということです。セックスというものを最大限楽しみたければ、それは夫婦の中だけであって、他では絶対に得られないということです。童貞と処女が結婚する、結ばれる。結婚するまでセックスをしないている。最高の理想的な状態です。それを子どもに味わってもらいたい、知ってもらいたい。そのことを伝えて欲しいと思います。積極的にも、ただこれをしちやいけな、あれをしちやいけな、これもダメあれもダメ、じゃなくて、ワクワクしながら、楽しみに、忍耐して待つように、そのようにも説いて欲しいと思います。

**21 節**を見て下さい。『人の道は主の御目の前にあり、主はその道筋のすべてに心を向けてくださる。』不倫というものは人目を忍んでするものです。誰も見ていない、と思ってラブホテルに入るわけです。ところが週刊文春の記者が写真を撮っているわけです、誰も見ていないと思ったら。もうここでは二人きり、なんて思わないで下さい。主の目はいつでもあるということです。子どもたちにもこのことを伝えて下さい。二人だけ、なんていう時間はないということです。主は全て見ておられます。「心を向けてくださる」とありますが、この言葉は **6 節**にも使われていました。『その女はいのちの道に心を向けない。』否定的に使われています。また **4 章 26 節**にも使われていました。『あなたの足の道筋に心を向けよ。そうすれば、あなたのすべての道は堅く定まる。』この「心を向けてくださる」という言葉は、直訳すると「平らにする」という言葉です。よその女は、道を平らじゃなくて凸凹にします。つまり、つまづくようにするわけです。でも主は道を平らにして下さる、つまづかないように守って下さるんです。そのために主が見ていて下さるということです。ただ監視しているということじゃないです。検挙しようと思って、常に目を光らせているという意味じゃないです。私たちがつまづかないように、道を平らにして下さる。覚束ない足取りで、小さな子どもが歩いている時、そこに障害物があるとします。親のあなたはすぐにそれを見て、走ってその障害物を取り除いて、その小さな子がつまづかないように、倒れないように、平らにしてあげるわけです。主も同じこととして下さいます。

**22 節**。『悪しき者は自分の咎に捕らえられ、自分の罪の縄に捕まえられる。』主が検挙するんじゃないんです。私たち自身の罪が、私たちを検挙するんです、捕まえるんです。ここを履き違えてはいけません。そして私たちは自分の罪に捕らえられ、罪の奴隷と化すわけです。「フリーセックスが出来る。これはフリーだ、自由だ。」とあなたは思うかもしれませんが。でも真逆です。聖書によれば、フリーセックスはあなたのフリーを、自由を逆に奪うものです。不自由にするものです。ポルノ中毒になるという話も先ほどいたしました。むしろ、日本語で言われている「自縄自縛」、自分で縛ってしまうという、自分の首を絞めるようなことになると。

エレミヤ書の2章19節をお読みします。聞いて下さい。『あなたの悪があなたを懲らしめ、あなたの背信があなたを責める。だから、知り、見極めよ。あなたがあなたの神、主を捨てて、わたしを恐れないのは、いかに悪く苦いことか。万軍の神、主のことば。』神ではなくて、あなたの悪があなたを懲らしめる。神ではなくて、あなたの背信が、英語ではバックスライドが、あなたを責めると。私たちは勘違いします。神に責められている、神に懲らしめられている。違います。罪を犯せば、その罪が責めるわけです。この罪を犯さないように、その事前に神が私たちを懲らしめるわけです。その前に神が責めるわけです。でもそれを無視したら、今度は自分の罪が私たちを懲らしめ、責めるんです。それは父なる神が懲らしめるのとは、全然レベルが違います。神が懲らしめる時は、それは愛を持って懲らしめます。罪が私たちを懲らしめる時は、私たちを罪悪感でいっぱいにします。責め立てます。後悔しか出来ないように。気を付けたいと思います。

実際に罪によってがんにがらめにされてしまうということは、中毒症とか依存症という言葉でも表現されますが、教会に通う男性の68%、女性の30%が頻繁にポルノを見ているということが報告されています。男性ばかりじゃないんです。女性も見ているんです。男性とは違う衝動でポルノを見るわけです。ストレスを解消するために、男も女もポルノに走ることがあります。ポルノサイトは、Amazonとかネットフリックスとか、またTwitterの3つを合わせたよりも、もっと多くのアクセス数があるということも報告されています。そして、ポルノには中毒性があるということ、これは麻薬と同じ影響をもたらすということも実証されています。脳のスキャンで、ポルノ中毒者の脳はヘロイン中毒者の脳と同じほぼ同じだったということも報告されています。神経心理学者のティム・ジェニングス博士は「どのようなタイプのものであれ、繰り返される習慣は私たちの脳に痕を作り、それは自動配列を攻撃するようになるのです。」ポルノを繰り返し繰り返し見ているうちに、どんな行動であれそれが繰り返されると、思考生活と行動がパターン化しプログラミングされると。これが第二の天性となっていくということです。そして、それだけじゃなくて、あなたの性欲が解放されると、あなたの脳は麻薬と同じくらい強い神経伝達物質でいっぱいになります。これが起こる時に、あなたが見ているものが何であれ、あなたはそれに取り込まれてしまう、統合されてしまうということです。ですからこういった物質、ニコチンもそうですし、アルコールもそうです。ギャンブルもそうですけれども、似たような症状が出るわけです。ポルノがあなたの脳を再構築してしまうわけです。そして何年間も、或いは一生あなたを縛りつけるわけです。聖書に言われている通りです。自分の咎があなたを捕らえ、自分の罪があなたに縄をかけるわけです。縛りつけるわけです。結果、あなたは伴侶を失うことになるかもしれません。家庭を失うことになるかもしれません。離婚の56%はポルノが主要な要因だと言われています。ポルノを見ていけば、伴侶を裏切る可能性が2倍も高まるということは、先ほど触れた通りです。そしてまた他にも、具体的なことについては、是非バイブル・スタディで箴言5章を学んだ時に、いろんな情報、数字、いろんなニュースや記事や実態というものを具体的に挙げていますので、そちらを是非聞いて頂いて、深刻に受け止めて頂きたいと思います。聖書に書かれていることは、皆本当だということ、真実であるということを確認出来ると思います。

最後に23節の言葉。『その人は訓戒を受け入れることなく死に、あまりの愚かさゆえに道から迷い出る。』これは第3版とは大分ニュアンスが違う訳になっていますね。「その人は訓戒を受け入れることなく死に、あまりの愚かさゆえに道から迷い出る。」結局、罪から来る報酬は死であります。婚外交渉、婚前交渉、それは聖書では姦淫の罪と言われています。不倫は罪と言われているわけです。淫らな行いは、全部罪だと聖書は言っています。でも不倫というのは日本の法律でも罪と、正確には罪という言葉は使いませんので「法律違反」と定められています。これは民法なんですけれども、民法の752条では「夫婦間の貞操義務」というものがあり、もし不倫をすれば離婚の事由となって、不倫は不法行為と言われて、賠償損害を求められるということです。別に不倫なんて皆やっていることだし。実際には、法律でもそれは「不法行為」と言われているわけです。ましてや神の目には、それは最悪の不法行為です。なぜならば、コリント人への手紙第一の6章に、9節からお読みしますから聞いて下さい。『あなた方は知らないのですか。正しくない者は神の国を相続出来ません。思い違いをしてはいけません。淫らな行いをする者、偶像を拝む者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、<sup>10</sup> 盗む者、食欲な者、酒におぼれる者、そしる者、奪い取

る者はみな、神の国を相続することができません。』これは神の法にも触れているわけです。これらの罪をやめないでいけば「神の国を相続出来ない」全てを失うと言っているわけです。勿論これは姦淫の罪だけではないということが分かります。性的罪だけではないということです。11 節には『あなたがたのうちのある人たちは、以前はそのような者でした。しかし、主イエス・キリストの御名と私たちの神の御霊によって、あなたがたは洗われ、聖なる者とされ、義と認められたのです。』感謝なことに、幸いなことに、私たちもイエス・キリストを知るまでは、この**第一コリント 6 章の 9 ～10 節**のリストにあった者たちであったわけです。でも今は私たちは洗い清められて、罪赦された者となりました。「でも、クリスチャンだってポルノを見るじゃないですか。クリスチャン夫婦だって浮気をしたり、不倫をすることがあるじゃないですか。牧師だって例外ではないじゃないですか。」その通りです。でももし、私たちが自分の罪を告白するならば、イエス・キリストはもう私の過去の罪、今犯している罪、そしてこれから犯してしまうであろう将来の罪も、全て贖って下さっていますので、私は罪の赦しを受けることが出来ます。でも、クリスチャンの中でも開き直って、何をしたって赦されるんだと、<sup>たか</sup><sup>くく</sup>高を括って一向にその罪を認めもしない、改めようもしない、悔い改めないでそのまま続けていく。「そのくらい、いいじゃないか。別に大丈夫。自分は地獄に落ちない、天国に行くんだ。」と、そういう人が神の国を相続出来るかどうかは、極めて疑わしいということがここに書いてあります。是非気を付けて欲しいと思います。これは罪が習慣化しているケースです。法律でも、1 回の不倫では不法行為にはならないんです。でもそれを続けて行くと不法行為になるわけです。例えば酒に酔って、その時全然覚えていない。勢いでつい、妻以外の女性と寝てしまった、こういったことについては不法行為にはならないわけです。ですから、離婚事由としては正当には認められない、そして損害賠償もそれだけでは、その一回の行為だけで求められないというところがあるわけです。でもこれを続けて行くと不法行為と。私たちが同じことを考えて、神の前で罪をやめないで続けて行くと、聖書に書かれている通り、もうこれは神の国を相続出来ないということになります。「そのうちに止めますよ。」と言っている人たち。いつ「そのうち」が来るんですか。「**わが子よ、今**」と聖書は言っています。今やめなかつたら、今決心しなければ、今悔い改めなければ、いつやめるんですか。明日あなたが死んだら、あなたは天国に行っていますか。神の国の中に自分を見ることになりますか。それとも、神の国を相続出来ないで、こんなはずじゃなかったと。あんなに何度も何度も警告を受けていたのに、私は訓戒を憎み、私の心は叱責を侮った、自分の教師の声に聞き従わず、自分を教える者に耳を傾けなかった。そしてその時には、もう集会、会衆の中ではなくて地獄で、あなたは最悪の状況を迎えることになります。その人は訓戒を受け入れることなく死ぬんです。あまりの愚かさゆえに、道から迷い出て、地獄へと墮ちて行くわけです。これは警告であります。

これでもう終わりたいと思いますけれども、そういう地獄に落ちてもおかしくないような罪を、私たちは数え切れないほど犯してきたわけです。でもこれをイエス・キリストが十字架で負って贖って下さったと。それが私たちが一番聞かなければいけない神の言葉です。どんな罪でも赦されます。あなたの過去がどうであれ、イエス・キリストがすべて負って下さって、イエス・キリストが赦すことの出来なかつた罪は一つもないということ。こんな罪も、あんな罪も、全部含めてです。でも、**一つだけ赦されない罪があります。それはイエス・キリストを信じない罪です。**唯一の道を拒否するという、これだけは神様がどんなにあなたを赦したくても、あなたがそれを拒んでいる限りは赦しようがないわけです。これだけは避けて頂きたいと思います。信じる者は救われます。でも信じないものはさばかれる。これが聖書の教えですから、皆さんには信じる者になって頂きたいと思います。では今日はこれで終わりたいと思います。